

**Special
Interview**

**神奈川
県知事
黒岩
祐治**

くろいわ ゆうじ



コミュニケーション再生で笑いあふれる「〇〇歳時代



東京都に隣接し、人口は全国第二位で九百万人を超す神奈川県。経済でも首都圏の主要な一翼を担うここ神奈川県のリリーダが、黒岩祐治知事です。今春の知事選では、二百二十五万票もの得票数を得る圧勝で三選を果たしました。テレビキャスター出身で、徹底して現場主義を貫く知事は、県民の生の声を聞く姿勢を大事にする一方、先進性とスピード感を重視し、常に時代の先を見据えた新しい政策を打ち出しています。そんな知事に二期八年の振り返りと三期目の課題についてうかがってました。

「いのち輝く神奈川」をつくるために

●二期八年の実績が県民から高く評価され、春の知事選は圧勝に終りましたが、この八年間を振り返ってのご感想はいかがですか？

黒岩 私は就任以来、一貫して「いのち輝く神奈川」をつくりたいと言いつづけてきました。私はジャーナリストとして長年、いのちという言葉が一番大事にし、こだわってきました。「命」ではなく、平仮名の「いのち」です。2011年3月、東日本震災の直後、背中を押されるような形で知事選への立候補を決意したのも、私が、いのち最優先、いのちが輝くということをずっと考

えてきたからこそでした。

いのちが輝くためには何が大事か。医療が充実するだけでは、いのちが輝きません。食の問題、農業の問題、エネルギーや環境の問題、教育の問題等々、ありとあらゆるものが連動して輝かないと、いのちが輝きません。

ところが、いわゆる政策的にいうと、医療政策、農業政策、環境政策と、全部別話になります。

霞が関ではこれらの政策は各省庁で担当が異なります。省庁が違うと、どうしても縦割りというものが生じがちです。そうした行政の縦割りを突破してそれぞれの政策を連動させていこうと私はやってきました。

県という単位で見ても、縦割り

的になりがちな部分はあるんですが、国から比べれば、遥かにそのレベルは違います。それは、国は「議院内閣制」で、県は「三元代表制」と制度そのものが違うことが大きな理由です。つまり、二元代表制というものは、ある種の大統領制みたいなもので、知事は知事で有権者から直接選挙で選ばれ、議会は議会で直接選挙で選ばれます。

県庁の職員は皆、組織上、知事の下にいます。知事は全ての職員の人事権を持っていますから、県庁職員に対してはこちらの方向に行くんだということを明確に示すと基本的にその方向に向かうことになります。そして議会と対峙す

PROFILE

黒岩祐治 (くろいわ ゆうじ)

昭和29年9月26日生まれ 兵庫県神戸市出身

[略歴] 昭和55年 3月 早稲田大学政経学部卒業

昭和55年 4月 (株)フジテレビジョン入社

平成21年 9月 同退社

平成21年10月 国際医療福祉大学大学院教授

平成23年 3月 同退職

平成23年 4月 神奈川県知事に就任。現在3期目

・フジテレビジョンでは昭和63年より「FNNスーパータイム」キャスターに。その後、日曜朝の「報道2001」キャスターを5年間務めた後、平成9年4月よりワシントン駐在。平成11年より再び「(新)報道2001」キャスターに復帰。

・自ら企画・取材・編集まで手がけた救急医療キャンペーン(平成元年～3年)が救急救命士誕生に結び付き、平成2年に第16回放送文化基金賞、民間放送連盟賞を受賞。

[趣味] 歌、ミュージカル、ダイビング、ランニング [座右の銘]「愚直」





Special Interview

黒岩祐治

る。議会はなかなか厳しいチェックをしますが、基本的に我々と同じ方向を向いているなら、政策が前に進んでいきます。そういう形で今までの八年間、私はさまざまな政策を実現させてきましたが、そうした結果が、県民の皆さんに総合的に評価していただけたのだろうかと思っています。

ただ、今回私が得た二百二十五万票という高い得票数に驕ることなく、初心を大事に、謙虚に県政を進めていきたいと思っています。

世界が目にした「未病」コンセプト

●八年間の実績の中で、知事も最も手応えを感じた政策を一つ掲げるとすれば、何になりますか？

黒岩 それはやはり「未病^{みびょう}」というコンセプトです。これは圧倒的な勢いで進む超高齢社会をどう乗り越えるかということです。

神奈川県は、今はまだ平均年齢が若い県です。ところが、これから、あつという間に超高齢化が進んで行きます。この進み方が全国どこよりも速いんです。

高齢者になったら病気になるって仕方がない、介護が必要になっても仕方がないと、みんなが思っ

ていて、現在のシステムのままで行くと、社会保障システムは遠くならず全部崩壊してしまいます。ですから、今のうちに変えなくてはいけない。その、変えるためのコンセプトが「未病」なんです。

未病とは元々、中国の漢方の中の伝統的な言葉ですが、これを現代風にアレンジしました。

真つ白な健康があつて真つ赤な病気になるという従来の概念ではなく、白から赤はグラデーションになって連続して変化している。そのグラデーションの部分が「未病」だという新しい概念です。要は、病気になるから治すのではなくて、未病の状態のどこにいても、少しでも白い健康の方にするのが大事だという考え方です。

「未病」を改善するには、食・運動・社会参加が大事だと言ってきました。こうした未病を改善するアプローチと、再生細胞医療やロボット技術、AI（人工知能）といった最先端の



従来の概念。健康（白）と病気（赤）の境界線が明確。現在の概念。赤（病気）と白（健康）のグラデーションの部分が「未病」。

医療や技術を融合させることで、健康長寿を実現し、新たな産業の創出にもつなげていきたいというのが、ヘルスケア・ニューフロンティアという政策です。現に、県が設立した「未病産業研究会」には、産業界から七百四十一社（令和元年九月一日現在）が参加してくれています。

この「未病」ですが、最初は周りの全員に反対されました。そんなのわからないとか、予防ではないのではないかという意見が大半でした。「予防」は病気（赤）の方に来ることを「予防防ぐ」ということです。いゆる白赤モデルです。「未病」は譲れないというので、あえて「ME-BYO」と英語にして打ち出していったら、むしろ海外の方が反応が早かったです。典型的なのはWHO（世界保健機関）で、「ME-BYO」コンセプトでやっていることと、神奈川県とWHOは覚書を結ぶことになりました。

そうした国際展開がきっかけとなり、政府の健康・医療戦略の中にも「未病」という言葉が入り、最近では外交の文書の中にもその言葉が入るという状況になってきています。

「昨年の電通の世論調査で「未病」という言葉を知っていますか？」と

いう問いに対し、五二・五%が知っていると答えました。六〇歳代の女性に関して言えば七一・九%の人が知っていると答えました。

「未病」という言葉が一気に新しい概念になってきたということには、やはり手応えを感じましたね。

現場の声を聞き、 県民の目線に立て！

●今回の選挙戦で知事は「取材」と称して県民の方々に直接、生の声を聞いて回ったどうかお聞きします。

墨岩 そうなんです。県民の皆さんの意見を直接聞くという心掛けて、これまでも「対話の広場」を定期的に何回も実施してきています。今回はもっと小さな単位でいいから、膝を突き合わせて皆さんの生の声を聞く「ミニ集会」をやってみようというので、十七日間の内に二十二回のミニ集会を開きました。

そんな中で非常に印象に残ったのは、医療的ケアが必要なお子さんを持つお母さん方の集まりでした。そのときに生の声を聞いてわかったことは、お母さん方があらこちらにたらい回しにされるということでした。

「医療的ケア児」の問題は、縦割り行政のはざまに一番陥りがちな

です。医療は厚生労働省管轄ですが、医療的ケアには医療分野と福祉分野があり、厚生労働省の中でも溝がでまがちなんです。そこにまた子どもですから教育の文部科学省が入ってくると、この間にもひびが入りやすい。

しかも、県と市町村との間がうまくつながっていないこともよくあるんです。

例えば、「こんな問題で困っている」と県に相談に行くと、「それは市の仕事なので市役所へ行ってください」と言われる。それで、市の医療の窓口に行ったら、「いや、それは教育委員会の話です」と言われる。「もうとにかくどこへ行ったらいいかわからない、しかもぐるぐる振り回されて、それもこんな医療的ケアの必要な子を抱えて。そういうことが繰り返されていくと、この子を連れて死にたいとまで思いました」と、そのようなことまで話されました。「私たちにに対して寄り添ってくれるような人たちはいないんですか」と言われて、これは本当に切実な問題だと思いました。

そして、お母さん方の訴えは、「ワンストップで対応できるような形にしてほしい」ということでした。それを聞いて、選挙戦の最中でしたが、

私はすぐに、あらゆる問題に対してワンストップで対応できる体制を作るよう職員に指示しました。

私はこれまでも「県民の目線に立て」と言ってきました。県民から見れば、どの部署が担当なのかは関係ないでしょうと。皆ひとまとめで行政なんですから。

しかし、県民の目線に立ってないことがまだまだあるなど、生の声を聞いて感じました。

「コミュニケーション再生で 笑いあふれる一〇〇歳時代」

●三期目の県政運営の大きなテーマとして「コミュニケーション再生で笑いあふれる一〇〇歳時代」を掲げていらっしゃいますね。

墨岩 一番大事なことは、ゴールは何かということなんです。

死なない社会をつくることは無理ですし、病気がない社会をつくることも不可能です。そこで、今、どんどん高齢化が進んで、一〇〇歳時代



を迎えるにあたって、どんなゴールのイメージをつくるのかというときに、皆がニコニコ笑っている、いのちが輝いている一〇〇歳時代、これがゴールなら実現できるだろうと考えました。

それを目指すにあたって、横浜にある「若葉台団地」に目が留まりました。

ここは高齢化の進み方がすごく速くて四八%です。全国平均が二八%ですから、とても高いんです。ところが、要介護認定率は全国平均が一八%なのに、この若葉台団地は二二%なんです。しかも、この十年間で下がっている。これは奇跡です！

なぜこんなことが起きるのだろうかと思つて現場へ行つて秘密を聞いてみたら、コミュニティの充実でした。一万五人ぐらいのマンモス団地なんですが、自治会組織がすごくしっかりしていて、多世代交流の場をつくったり、子育てママさんを支援する輪をつくったり、スポーツイベントをやったり、文化イベントをやったりと、次から次へといろいろな交流事業を展開していました。

それで、「要介護認定率を下げよう」という目的で活動をしてきたので「すか」と聞いたら、そうではなくて、

「楽しい団地を、住みやすい団地をつくりたいという一心で自治会活動をしてきたら、結果的に要介護認定率が下がったんです。」というお話でした。まさに、いのち輝く高齢化をつくっているわけです。コミュニティの力は、すごく大きいんだなあと感じました。

今は、その大事なコミュニティがどんどん崩壊してきている時代。そのコミュニティを何とか活性化、再生していかなければいけない、それが最重要課題だと思つたわけです。

そのときに、もう一つの切り口として、「笑い」というのが本当に力があると感じていました。最近、中年の引きこもりが話題になっていますが、引きこもつて一日誰とも話さない人は、全く笑つてないのではないかと思います。人と人がふれあうから笑う。皆が笑っていると、横にいる人は何でおかしいかわからなくても笑う(笑)。笑いというのは、そういう意味で、コミュニティをつくつていく大きな力があります。

笑いを研究してみると、笑いが健康にいい影響を与えるという科学的データは全部揃っていました。そうであれば、笑いを広げていくことによってコミュニティが活性化、再生して行く。コミュニティが活性化、

再生することによって、また笑いが広がってくる。そんな明るい一〇〇歳時代を目指していこうではないかというのが、今一番のゴールと考えているところです。

超高齢社会を乗り越える「ドローン前提社会」

●常に時代の先を見据えていらつしやる知事ですが、ドローンの活用も三期目の主要な政策の一つに掲げられていますね。

黒岩 今、超高齢社会が社会的課題ですが、それを乗り越えていくために、未病コンセプト、その延長線上として笑い、コミュニティの再生が重要だと言ってきました。それらは極めてヒューマンなつながりの面で課題を克服していくという話です。

もう一つの側面として、最先端のテクノロジを活用することで、この課題を乗り越えていけないかという話です。

今は「第四次産業革命」と言われています。例えば、IoTとか、ビッグデータとか、AIとか、ドローンとか、そういった最新のテクノロジを駆使することによって社会的課題を解決していこうという「ソサエティ5.0」とい



ったものが時代の大きな流れになっています。そうした最先端技術を使って超高齢社会という課題をどう乗り越えるかと考えたときの一つの答が「ドローン前提社会」だったわけです。

元々、県では「さがみロボット産業特区」を獲得して、最先端のロボットを開発できる拠点をつくってきました。その中で、例えば、箱根火山が活発化し、人が入れなくなつたときに、ドローンが飛んで行つて火山の状況を見ることができないか、研究開発して、すぐに製品化しました。また、農業の担い手の高齢化が進む中、農家の皆さんがシカやイノシシなどによって畑や農作物を荒らされる鳥獣被害対策にドローンを活用できないかといった研究も進んでいます。このほか、将来的には災害発生時に自動で飛び立ち、上空から情報を集めて映像を送つて来る災害対応ドローンや、農林水産業での農薬散布や収穫物の運搬といった社会的課題

黒岩祐治

に対してドローンなどを活用するこ
とで、笑いあふれる未来社会がつく
れるのではないかと思うんです。

国連も注目する 神奈川の「SDGs」

●最近、プラごみによる海洋汚
染が問題になっています。環境保
全について神奈川は先進県である
とうかがっておりますが…。

黒岩 冒頭申し上げたように、
「いのち輝く神奈川」をつくりた
いと言ってきました。そのため
は、さまざまなものが連動しなけ
れば駄目だとも言ってきました。
そうしたら、国連が「SDGs」
と叫び始めました。

「SDGs」は「持続可能な開

発目標」のことです。2015年
9月の国連サミットで採択された
もので、2030年を年限とする
十七のゴールを定めたものです。
要するに、今のままで行けば、地
球は持続可能ではなくなるとい
う危機感です。そのために、今のう
ちにやらなければいけないことは
何か、一つひとつ見てみたら、私
が「いのち輝く」で言っているこ
ととほとんど同じだったんです。
国連が言っているのだから、これ
は世界の流れだということ、私
たちがやってきたことを全部翻訳
したら、見事にSDGsと一致し
たんです。

私たちはSDGsそのものを実
践して来たわけです。第一期の「S

DGs 未来都市」と「自治体SD
Gs モデル事業」の両方選ばれ
たのは十の自治体だったので
が、そのうち全国の都道府県の中
では唯一、神奈川県だけが選ば
れました。第一期ではベスト十に神
奈川県の他に横浜市と鎌倉市が、
第二期では川崎市と小田原市が選
ばれました。これは、全国の都道
府県で最多です。それならSDG
s 最先端を走り続けようというこ
とで、去年、県庁に「SDGs推
進本部」を立ち上げました。そし
て県が主催して「SDGs 全国フ
ォラム2019」を横浜で実施
し、大臣や全国の首長にも皆集ま
っていただき、「SDGs 日本モ
デル」宣言も発表しました。

すると、今度は国連から招待を
受けて、この七月に国連本部へ行
って来ました。そこで、私自身が
SDGs についての神奈川県を取
組みや活動状況を発言し、説明し
てきました。

●さぞ気持ちよかったですよ
ね、そついうスピーチされるのは。

黒岩 いやあ、それは気持ちよ
かったですよ（笑）。それで、その
演説の最後に「みんなでゴールを
目指してやっていこう。そのため
に大事なことは、ミッション、パ



2019年7月の米国訪問で、国連ハイレベル政治フォーラム（HLPf）の主要イベントである「Local2030」に登壇し、神奈川県SDGsの取組みについてスピーチした黒岩知事（7月16日/ニューヨーク）

ッション、アクションだ！」と言
つたら、国連の会場で、うわーっ
と拍手が沸き起こったんです。

その翌日に、UNDP（国連開
発計画）のシユタイナー総裁にお
目にかかった時に、「昨日のスピー
チはたいへん盛り上がったそう
すね」と挨拶を受け、いろいろ話
をしていくうちに、神奈川県と組
みたいということになりました。

そしてつい先日、日本で「TI
CAD7」（第7回アフリカ開発
会議）が催されたとき、シユタ
イナー総裁も来日され、「SOI」
という連携趣意書にサインしまし
た。このようにUNDPが自治
体と協定を結ぶことは極めて稀
で、日本では初めてのことです。

神奈川県がこうした「いのち輝
く」取組みが、国連という舞台を
通じて世界的に発信できること
は、非常に大きな意味があると思
っています。